

# 序 文

本書は、2019年4月より2024年3月まで、5年間にわたって行われた京都大学人文科学研究所の共同研究班「20世紀中国史の資料的復元」（班長：石川禎浩）の研究成果報告論文集である。この研究班のテーマについては、少し説明があるかも知れない。「20世紀中国史」はよいとして、問題は「資料的復元」の方である。「20世紀中国史」を「資料的に復元する」とはどういうことなのか。この研究班を発足させるにあたって、わたしは次のように書いて、その構想を説明した。

中国における近現代史の叙述は、領域によって程度の差はあるものの、長らくイデオロギー型革命政党（国民党、あるいは共産党）によって統制され、方向付けられてきました。それら政党が、いずれも自己中心的、あるいは独善的な歴史像を持つだけでなく、そうした歴史像を支えるために、歴史資料の収集やその編纂、刊行にも力を入れてきたことは周知のとおりです。ただし、そのさいに資料がしばしば、かれらの歴史像や時々的情勢の求めに符合するよう選択、編纂（改竄を含む）されてきたことを理解せねばなりません。その結果、政治史にせよ、思想史にせよ、あるいは文学史にせよ、既存の公刊資料に基づく限り、研究者は知らず知らずその枠組に縛られてしまうか、あるいはそれを知っていても、その枠組みから容易に脱却できないという苦境に置かれてしまいました。それゆえ、近代の中国がどのようなものであったのかを知るためには、極端な話、まず基本的な史料をひとつひとつ編纂状態以前にもどすという気の遠くなる作業から始めなければならなくなっていると言えるでしょう。

こうした基本資料に関して、その生成や発掘、編纂、改変、出版、利用がどのようなになされてきたかについては、恐らく各位がそれぞれの研究領域で自覚的に取り組んでいるのではないかと思います。この研究班ではそれをそれぞれに披露し合い、例えば、この領域の○○の基本文献は実は△△がもとになっているのだけど、編纂されたさいに××の問題点を抱えていて、○○に復元しないと史実に近づけないということを持ち寄って討議したいと考えます。あるいは、今まで自分がよく使ってきた資料について、そのようなことを意識したことはなかったという方には、この機会にご自

身の研究の大事な根本資料がどのように形成、加工されて「資料」として利用されるようになったのか、一度自覚的に取り組んでみられてはどうでしょう？

この研究班で取り上げる資料とは、できれば比較的常用され、よく知られている資料であることが望ましいわけですが、我々はそれぞれにかなり専門的な研究をしていますから、基本資料といっても、かなりマイナーなものも多いことでしょう。研究班では、特に資料の知名度に定めを設けず、また言語も中国語に限定せず（つまり20世紀の中国に関係のある資料であれば、日本語でも英語でも可）、まずは自身の専門分野や自分の研究領域でなじみとなっているものをとりあげることから始めてもよいだろうと思います。また、資料と言っても、思想史や文化史、文学史では、ある作品がその資料にあたることも多いことでしょう。むろん、その場合は、ある作品がどう書かれ、どう編纂され、どう刊行されたのか、その過程で一つの作品がどう変わっていったのかという作品書誌学に近いものになることも大いにあり得ることだと思います。

このような構想を持ったのは、本研究班に先だつ「毛沢東に関する人文的研究」班の経験を踏まえてのことである。『毛沢東選集』に収録されている文章は、発表当時のままではなく、後年特に人民共和国建国後に毛自身によって修訂が加えられている。つまり、『毛沢東選集』に収録されているかれの文章だけをとって、その当時の毛の思想をあれこれ論じるのは、実はかなり危ういことなのである。1970年代までの毛沢東の一言半句の持っていた強い規定性を考え合わせるならば、ことはかなり深刻であって、それゆえ、毛選の字句が元のままではないということは、毛沢東研究のみならず、中国近現代史を研究する斯界の常識でもあったといつてよい。

ところが毛沢東班での議論を通じて、院生や若手は新たな文献、例えば世紀転換期あたりから開放がぐっと進んだ中国の档案馆などの新公開档案をいち早く活用して新分野を切り開いてはいるが、他方でそうした基礎文献のはらむ問題点を存外知らないことがわかり、わたしはいささかショックを覚えたのだった。そしてこう考えた。「『毛沢東選集』はほんの一例に過ぎない。研究班に集うそれぞれの研究者は、日頃から自分の専門とする領域のデータや資料をあつめており、その方面にはどんな立派な工具書なり資料集なりがあるか知っているに違いないが、その資料集がどんなプロセスで作られたのか、データはどんなふうを集められたのか、考えたことがあるだろうか。ならば、研究班という各種の専門家の集まる場で、各自がその専門分野で代表的、かつ重要と見なす資料について、その成り立ちや問題点を報告しあうことにすれば、みずからの研究を振り返る一助になると同時に、日頃他分野の研究にさほど関心をしめさない傾向にある中国近現代史の専門家たちの目を

開かせることにつながるのではないかと。

かくて「20世紀の中国の政治、運動、文学、芸術といった領域で、それぞれ根本資料と見なされてきた基本文献を『毛沢東選集』のように、その生成や編纂、刊行の経過を洗い直した上で本来の姿にもどし、それによって中国20世紀史全般を復元し、再構築しよう」と呼びかけて、この研究班は始まった。だが、半年ほどがたち、2018年3月の森川裕貴助教離任以来欠けていた助教のポストも都留俊太郎君の着任で埋まり、いよいよ本格始動しようとした中、新型コロナのパンデミックがやってきてしまった。2020年3月以降は会議室での対面の例会開催ができなくなり、代わってインターネット会議サービスのZOOMを用いたオンライン開催となった。ウィルス禍の急激な拡大と社会活動の萎縮、大学をはじめとする対面・接触を伴う活動の自粛と規制が他方で急速なオンライン会議の普及を実現させ、研究室からパソコンの画面ごしに互いが対話するのが当たり前となった。ZOOMを活用する方法も資料画像、動画の提示をはじめとして長足の進歩をとげ、研究班での報告や討議の方式もだいぶ変化したように思う。人文科学研究所では2020年の7月あたりから会議室での研究班開催が部分的に再開されたが、一度始まったオンライン並行開催の方式は、特に遠方に住まいする班員にとっては、例会参加の後押しとなり、今もそのハイフレックス方式は続いている。

以下、形式的に研究班の開催情況のあらましを述べる。本研究班は2019年4月に3年計画で発足したが、上述のコロナ禍などで研究の進展に影響が出たため、それぞれの研究課題への取り組みに時間を要し、結果として3年目終了後に1年、その後さらに1年延長し、都合5年にわたる開催となった。研究班例会は、隔週一回の割合で金曜午後（2時～5時）に当初は人文研本館3階のセミナー室4で行い、コロナ禍でオンライン並行開催となつてのちは、機器の便のよい4階の大会議室で開催した。例会開催は、5年間で計80回を越え、報告者は合評会での評者を合わせてのべ92人、毎回の例会参加者は15-20人ほど、のちハイフレックス方式になってからは会場参加10-15人、オンライン参加が6-7人程度だった。オンライン参加者をふくめ延べにすると、参加者は約1,800人に達する。毎回おおむね1人の報告者が1週間ほど前までに報告レジюмеを参加者に配布した上で、当日1～1.5時間ほど報告し、その後あらかじめ決められたコメンテーターが論評を加え、それを受けて報告者の応答と全体討議を行うというのが、例会のスタイルであった。それぞれの回の開催日時と報告者、報告テーマ、コメンテーターといった開催記録については、『東方学報』第95-99冊（2020-2024年）の彙報欄に掲載されているほか、人文科学研究所附属現代中国研究センターのウェブサイトの関連欄（<https://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~rcmcc/group1.htm>）に掲げてあるので、ご覧いただきたい。

本報告書に収録する17篇の論文は、すべて班員相互の査読を経たものである。研究班に参加された方の中には、諸事情によりこの論文集に寄稿されなかった方、あるいは寄稿・修正が間に合わなかった方もおられるので、研究班の終了した2024年3月時点での班員の氏名（本論集への寄稿者を除く。敬称略）を以下に掲げておく。秋田朝美、アルス、郭まいか、菊池一隆、韓燕麗、谷雪妮、小堀慎悟、坂井田夕起子、漆麟、祝世潔、徐璐、鄒燦、瀬辺啓子、谷川真一、団陽子、張子康、津守陽、鄭成、程天徳、手代木さづき、土肥歩、中村元哉、範麗雅、比護遥、福家崇洋、三田剛史、孟奇、山崎岳、楊奎松、楊韜、羅亜妮、李冬木、陸家振、林礼釗、和田英男。

また、研究班の活動は隔週の例会が中心ではあったが、研究班及び現代中国研究センターの関連事業として、講演会や合評会を何回か開催している。主なものを列挙すれば、以下の通りである。

2020年2月22日 講演会 金順姫（朝日新聞社）「習近平『一強体制』の足元——いま中国で何が起きているのか」

2020年10月31日 シンポジウム「中国学研究と翻訳」（報告者：ジョシュア・フォーゲル〔カナダ ヨーク大学〕、伊藤真〔翻訳家〕、楊韜〔仏教大〕）

2021年9月7日 狭間直樹著『近代東アジア文明圏の啓蒙家たち』合評会 評者：岡本隆司（京都府立大）、坂元ひろ子（一橋大名誉教授）、森川裕貴（関西学院大）

2021年11月6日 「東西合同書評会 中共一百年」（石川禎浩著『中国共産党、その百年』、高橋伸夫著『中国共産党の歴史』の合評会） 評者：中兼和津次〔東京大名誉教授〕、丸田孝志〔広島大〕、金野純〔学習院女子大〕、鈴木隆〔愛知県立大〕

2022年3月19日 小野寺史郎著『戦後日本の中国観』合評会 評者：馬場公彦〔北京大学 外籍専門家〕、竹元規人〔福岡教育大〕

2022年9月8, 15, 22, 29日 人文研アカデミー連続セミナー「近現代中国研究の最前線：現代中国研究センター設立15周年」

小野寺史郎「京大人文研の近現代中国研究の歴史」

村上衛「中国経済の特徴は何か——中国近代史から考える」

都留俊太郎「台湾独立とは何か——ことばの歴史から考える」

石川禎浩「毛沢東と田中角栄の会談——国交正常化50周年にあたって振り返る」

2022年11月11日 講演会 楊瑞松（台湾 政治大学）「明治日本生まれの「眠れる獅子」：中国「睡獅」記号についての新探索」

2023年3月5日 中共百年史書評会（石川禎浩著『中国共産党、その百年』、高橋伸夫著

## 序 文

『中国共産党の歴史』の合評会) 評者:楊奎松(中国 華東師範大)、谷川真一(神戸大)、丸川知雄(東京大)

2023年7月29日 「清末民初の東三省」ワークショップ(報告者:李皓〔中国 東北師範大〕、閻立〔大阪経済大〕)

2024年3月29日 講演会 馬駿(フランス モンペリエ第三大学)「1914と近代中国政治の軌跡」 討論者:楊韜(仏教大)

このほか、直接にこの研究班の活動に関わるものではないが、2019年以降には、人民共和國建国70周年、中国共産党結成100周年、さらに日中国交正常化50周年など、歴史の節目となる行事が相次ぎ、大国化したその行く末とあわせて現代中国が広く注目を集めたため、現代中国研究センターとその研究もそれなりに注目を集めた。研究班班長であり、同時に現代中国研究センター長をつとめるわたしも、関連の講演などをかなり行った。京大の関連行事だけでも例えば、

2019年4月 京都大学春秋講座講演「大国への歩み——中国共産党の30年」

2023年11月 京都大学11月祭本部講演「中国共産党の100年を検証する」

と二回の講演を行っている。ちょうどこの研究班が発足した時あたりと、研究班が最終盤にさしかかったころにあたるが、かねてから学術をはじめとする思想界・出版界への締め付けが強まっていた中国では、新型コロナウイルスのパンデミックを挟んで統制、圧力がよりいっそう強まった。2019年の講演のころには何とか続いていた中国との学術交流はパンデミックが終わっても事実上停止したままである。この間、研究班のメンバーを含む多くの日本の研究者が中国での資料収集や調査を長期にわたって断念せざるを得なくなり、「資料的復元」の土台が大きく揺らぐことになったのは、返す返すも残念なことだった。

他方で目を中国に転じれば、いささか逆説的ながら、歴史という分野はこの間かなり「厚遇」されてきたということもできる。習近平体制下の中国では、コロナ禍以前から政治と歴史の一体化が進行し、題目としてはいわゆる「四史」の重視がさかんに唱えられた。組織・制度面では2018年に党中央直属の党史・文献部門が合併して「中共中央党史和文献研究院」なる大型部門が発足したのに続き、翌2019年には中国社会科学院の歴史系諸研究所が合併して「中国社会科学院中国歴史研究院」というこれまた巨大な機構が生まれていたが、この間、資料の公開などは全くと言って良いほど進展を見せなかった。歴史研究のための環境整備が全く進まないまま、歴史の叙述だけが膨脹し、立派に飾られていく。党による歴史の丸抱えとも言えるべきこうした事態は、2021年の中国共産党結成100周年の関連イベントである頂点に達した。その代表的なものが100周年に合わせた中国共産党の3つ目の歴

史決議である。

皮肉にも、「資料的復元」はこうした逆風の吹く中国の国内情勢を横目で見ながら進められることになった。本論文集に収める諸論考はいずれも過去を対象とする歴史学的アプローチによるものだが、現下の中国ですすむ歴史の恣意的利用を見ていると、あるいは今よりのち30-50年後には、同様の手法で「2000-2020年代中国史の資料的復元」が行われることになるかも知れないと考えたりするのである。その意味では、ここに収めた論考の数々は、党史以外のものも含めて、将来のそうした復元にとって、参照さるべき価値を持つものだと確信している。

研究班の運営は多くの方々の協力がなければ円滑には進まない。これは今も昔も変わらない。5年間の研究班運営にあたっては、2020年1月に都留俊太郎さんが現代中国研究センターの新任助教として着任するまでは、センター受け入れの京大大学院文学研究科ポストク生（郭まいか、望月直人、瞿艶丹、李ハンキョル）諸氏の、またその都留さんが2023年11月に台湾の中央研究院に転任されてからは、同じく瞿艶丹さん（京大人文研非常勤研究員）、孟奇さん（京大文学研究科院生）の献身的な支援を受けた。ZOOMによる遠隔開催の準備と実施にあたっては、都留さんに技術的なサポートをおおぐことにより、スムーズに対応できたのは、甚だ幸いであった。

ただ、その一方でこの研究班の開催期間に、一再ならず研究班関係者の追悼行事をせねばならなかったのは、きわめて辛いことだった。本研究センターは、2007年に人間文化研究機構（NIHU, 大学共同利用機関法人）と京都大学との連携研究事業（現代中国地域研究京都大学拠点）の実施主体部署として設立されたもので、2018年3月の事業終了まで、前後二人の客員教員を措置されたが、2017年退任後まもなくに脳梗塞で亡くなった武上真理子さんに続き、2020年5月にはその前任者であった袁広泉さん（2012年離任後、江蘇師範大学副教授）が心臓発作で急逝してしまったのである。これまで中国近代史関連の研究班論文集などの翻訳に類い希な能力を発揮していた袁氏は、その離任（帰国）後も折に触れ我々の研究活動をサポートしてくれていたが、そのかれがあっけなく亡くなったのである。そして、かれの追悼会をシンポジウム「中国学研究と翻訳」（2020年10月31日）とあわせて開催してまもなく、2022年3月には本研究センター設立時のセンター長で、人文研の中国近代史研究班を長年にわたって主宰された森時彦氏（京都大学名誉教授）病逝の訃報に接することになった。ちなみに、わたしの人文研の研究室の東隣は袁さん、継いで武上さん、そして西隣は森さんであった。数年の間に朝な夕な親しく顔を合わせていた人が3人相次いで亡くなったわけである。このほか、当初この研究班に参加されていた吉田豊子氏

## 序 文

(元京都産業大学准教授)の訃報(2021年6月)と、本研究班で思想史関連の報告のさいに何度かコメンテーターとしてお越しいただいた一橋大学名誉教授の坂元ひろ子氏の訃報(2023年10月)を聞かねばならなかったのも辛い経験だった。

そしてこの論文集のとりまとめに際し、わたしはいま一人の研究班員を見送ることになった。昨年4月に69歳でお亡くなりになった大阪大学名誉教授の田中仁氏であり、本論文集に収録の「現代中国政治の転換と農村幹部：河北省 X 県の事例」は、実は氏が生前に書き残した最後の作品、遺稿である。本書刊行時にはすでに故人となっている氏の文章を収録した経緯については、ひと言説明しておく必要がある\*。

本論文集に収録する氏の論文は、河北省のある農村の共産党幹部の工作筆記(1948-1989年、全84冊、手書き)の読解をもとに、1976-82年時期の政治の転換が農村の現場に何をもたらしたのか、基層レベルで解明した労作である。この論文は、氏が研究班で行った2回の報告(2020年12月、2023年2月)をもとにして書きあげたものだが、二度目の報告はある意味で命を削ってなされたものだった。2020年春に阪大を定年退職したのち、田中さんは喉の疾患で気管を切開手術、以後自宅で器具を付けての療養生活を余儀なくされた。だが、田中さんは最後まで研究班への参加と論文執筆に意欲を見せ、寄稿前に病軀をおして班例会での報告を行われた。そしてその後、資料の利用と公表をめぐり、所有者の遺族らと粘り強く協議・交渉を重ねたうえで、人名や地名を記号表記にするなどの加工をほどこして提出されたのが、本書所収の田中論文である。田中氏が作成した原稿の最終版については、その遺族とのやりとりを経た最終修正版のデータが、田中氏の死後に中国南開大学の張思教授から提供されたので、それをもとに石川が整形し、田中氏の後輩にして研究班員でもある丸田孝志氏に校訂をしていただいた。最期の瞬間まで研究一途だった田中さんの遺稿をこのような形で収録できることをうれしく思うと共に、張思、丸田の両先生には心より御礼申し上げたい。

この報告論文集はこのような様々な思いを載せ、研究仲間の協力の上に上梓される。印刷・刊行にあたっては、上述の諸氏の協力の他、人文科学研究所の実施する全国共同利用・共同研究「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」の事業に係る刊行物の出版助成を得た。記して謝意を表す。また、この報告書は、科学研究費基盤研究(B)「中国共産党史資料の再構築に向けた基礎研究」(課題番号23H00675、および23K25372;研究代表者:石川禎浩)の中間的成果の一部である。

---

\* 田中論文の完成と提出の経緯については、「ある研究班員の執念」と題して、人文科学研究所の所報『人文』71号(2024年6月)により詳しく説明をしている。

本書に収めるすべての論文については、本書の刊行後にそのPDF版を人文科学研究所附属現代中国研究センターのウェブサイト、ならびに京都大学学術情報リポジトリ(KURENAI)上に公開する予定である。

2024年3月31日

人文科学研究所附属現代中国研究センター

石川 禎 浩